
とある映画

火水 風地

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある映画

【Nコード】

N7269B

【作者名】

火水 風地

【あらすじ】

最近の俺は異常だ。とにかく異常なんだ…世間では俺のような人を精神異常者というのかな…

(前書き)

修正しました！

-
-
-

またこの感じ。

この光景見たことあるな、とかあれ前にもこういうことあったよ
うな、とかそういう類の既視感と呼ばれるもの。

いつごろからかは記憶にはないがずっと前からこの感じは続いて
いる気がする。

それを今感じた。

「どうした？ 誠？^{まこと} リアクション薄いぞ」

明らかに半笑いの高い声が回想から俺を連れ戻す。

「ん？ ああ悪い悪い、なんでもねえよ」

誠と俺をおちやらけながら呼んだのは小学校からの長い付き合い
になっっている佐藤 修也^{やっや}だ。俺はこいつのことを愛着こめて修と呼
んでいる。

最近の既視感はいいつに關係することが多い。修が次に何を言う
のか分かったり、何をするのか分かったりという風に。

さっきだってこいつの言うことが分かってしまっていたからリア

クシヨンが薄くなってしまったのだ。

「お前最近…な、ん、か、変だぜ。いつも上の空みたいな」

こいつは勘が鋭い、それは餓鬼のころから高校に上がったいまでも変わってはいない。その勘のせいでこいつに嘘は通じない…だからおれはその勘が鈍ってくれることを密かに願っていたりする。

「んやーそんなことないって。それより今日部活ねえんだろ？
だったらさっさと帰ろうぜ」

「ああそうだな……こんなつまない学校さっさとおさらばしますか！」

体全体で笑いながら修はそう言う。こっちまで何か楽しくなってきた。

-
-
-
-

俺と修が校門から二人して一緒に出た時俺はまた不意に既視感を感じた。

「修！ 動くな！」

「ん？ どうし……」

修が立ち止まった瞬間目の前を大型車が猛スピードで駆け抜けていった。危機一髪というか間一髪というか本当にギリギリのところ

で事故を未然に防げた。あの勢いの車にぶつかったらきっと怪我だけじゃすまなかっただろう……きっと死んでいた。

「うおおおお！！ ああ、危ねええ！」

『し、死ぬかと思ったあ』

妙な既視感のおかげで助かったのはこれが初めてのことはない。昨日だって危うく信号無視して渡ろうと思ったのを既視感が止め次の瞬間には車が……なんてこともあったし。ん？それは昨日のことだったか？ ……

「た、た、助かったぜ恩人。有り難う」

修の感謝の文句に我に返る。

「いやいやいや無事で、なにより」

俺は時間の感覚がおかしくなっていることに気づいたことを忘れてしまった。

-
-
-
-
-

それから何事もなく無事に自宅に着くことができた。勿論修とは途中で別れた。

家にはただいまも言わず入り、俺はそのまま流れるように自室に行き近頃の自身についての異常について考え始めた。

『どう考えてもこの既視感の正確さはおかしい。そもそもこれは既視感と呼べるものなのか？ …… 既視感というよりは予感などといった方がいい気がする。起きることが事前に分かっってしまうのだから……』

- - - - -
- - - - -
-

異常はそれから弱まることなく、むしろだんだんと強まっていた。このごろではたいていのことは予め予測がついてしまうようになってしまった。特に俺と関わりの深いモノについてのそれはほぼ百パーセント当たってしまう……

『つまらない、つまらない、つまらない』

今は学校にいるのだがそこですべきことはもう終わった、つまりもう時業は全て終わり放課後に入っている。今日は確か全ての部活が活動停止になっているはずだ。早く帰ろう。そう思っていると不意に俺の突っ伏している机に影が差した。

「なんかさ、最近精神異常の患者が多くなっているらしいぜ。なんでも未来が見えるだの、なんだの…… 馬鹿みたいだよな!？」

修の高い声に反射的に顔を上げる。

- - -

またこの感じ。

この光景見たことあるな、とかあれ前にもこういうことあったよな、とかそういう類の既視感と呼ばれるもの。

いつごろからかは記憶にはないがずっと前からこの感じは続いている気がする。

それを今感じた。

「どうした？ まこと 誠？ リアクション薄いぞ」

私は映画を観ている。

つまらない映画。

最近流行っている映画。

だけどやっぱりつまらない映画。

面白みなんか無いに等しい。

そういえば私はどうしてこんな映画を観ているんだっけ？

あまりにつまらなくて忘れちゃった……

ああそういえば……

巷ではこの映画は観るたびにその内容が変わるといわれているんだっけ。
ちまた

「ん？ ああ悪い悪い、なにかがおかしい気がするんだ」

（後書き）

感想は頂ければ嬉しく思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7269b/>

とある映画

2010年11月28日05時50分発行